

雜 報

新 著 紹 介

加 藤 正 世 蟬 の 研 究

東 京 三 省 堂 發 行 ￥4.5

加藤氏十年苦心の結晶，畢竟是は力作である。本書を座右に備へたる人は自らなる心強さを禁じ得ぬであらう，蟬のことなら矢でも鐵砲でも持つて來い，此の書を繙けば立ち所に解決出来るのだぞと。

本邦に於ける同翅目殊に蟬の専攻家として令名ある加藤正世氏は其の少年時代より蟬學者としての今日に至る迄の總決算として，宛も東京市内の蟬の先驅＝イ＝イゼミが吾が世を謳ふ鳴音と共に本書を梓に上された。函入菊判布裝，表紙は金泥を以て蟬の脱皮殻を現はし落着いた瀟洒な裝幀。以下順に披き行けば扉には愛知縣の蟬胤の圖，「此の世に在ること僅かに三週目，はかなき蟬の命にも似た」今は亡き愛息夏樹さんへの獻呈の辭，見事なる内外産蟬類原色寫眞版4葉，まへがき，目次，挿圖目次，序，それより愈々本文に入り421頁，挿入の寫眞並びに圖畫122個（殆ど總べては著者原圖），略符の解から索引が25頁，卷末の圖版二十數葉といふ豊富なる内容である。Monograph of Cicadidaeの副標題にても判る通り日本産並びに一部の外國産蟬類總攬圖説とも稱すべき學術書ではあるが，全體に高雅な趣味性が横溢して居て著者加藤氏の全貌を髣髴たらしめる。

本文は緒言を以て始まり研究史，蟬科の體制，外部解剖，附屬器，内部解剖，發音器，生活史，生態學的研究，變異，飛翔，自然敵，蟬と人生，分類（此の章では新大陸産のものに新亞科1，新屬1を設けられた），分布を経て各論となり170頁以上に互り日本産Cicadidae各種，亞種，變種，型，變型全部の分類學的記載があつて中に新變種4，新型2，新變型3の原記載を含む。續いて採集，標本製作及び研究法があり20頁に及ぶ文獻目録で本文大團圓となる。此の文獻目録は假令完全無缺と申されないにしても（即ち原著の標題と少し違つて居たり，1932年以前の文獻で洩れて居るものもある）氏が非常な努力を拂つて編成せられたもので同好者にとつては無二の便覽たるを失はない。蟬と人生と題する一章があるが是などもつと細説して下さつたらと惟ふ感が深い。蟬と文學と謂ふ方面は他日本書の姉妹篇として公表する御意圖ださうであるが，其の節は蟬と人生其他趣味的の領域をも充分詳述して頂き度い。蓋し氏はさうした方面でも最適任者であられるから。

今を去ること二十餘年，現文學博士西村眞次氏，醉夢の雅號を以て本書と同じ標題の「蟬の研究」なる好著を世に公にされた。併し氏は元來昆蟲專攻の士であられぬから其の内容學術的には多少遺憾の點なしとせず，加之該書は今日頗る稀覯となり古書肆の店頭に見ることすら容易でなくなつた。茲に西村氏の舊標題を襲ひ面目更新の觀ある加藤氏の御勞作を迎へたのは本邦動物學界にとり大いに慶祝すべきことである。過去十年蟬の爲には寢食を忘れた加藤氏である。斯かる快著が鉛槧に附せられたのも偶然ではない。

蟬の伯父さんとも稱すべき氏の手には掛つて研究の犠牲となり非業の死を遂げた蟬は數へ切れぬものであらう。だが彼等の獻身的奉仕は加藤氏をして今日燦たる御業績を誕生せしめたのであるから以て限すべく，それでも不足と謂ふなら來世は生れ代つて昆蟲學者にでもなるが宜しからう。

蟬は子供にとつて夏休みの景物の尤なるもの，當代屈指の閣臣將星も嘗ては藪竿擔いで蟬取りに日の短きを託つ凸坊であつたに違ひない。本邦人には古來馴染の深い蟬を學術的にあらゆる點から至れり盡せりの解説をして餘蘊無いのが此の書である。動物學徒必愛携用の書として敢へて一冊を座右にお薦めする。

（高島春雄）